

こころの玉手箱

文化人類学者

須藤 健一

2

「弟の形見と思ってこれをお持ち下さい」

手渡されたのは、ミクロネシア連邦初代大統領、トシオ・ナカヤマの死に装束用に準備していたビーズの首飾りだ。姉のヨシエさんが分けてくれた。その直後、2007年にトシオは亡くなった。

ミクロネシアは私が初めて訪れた海外の調査地だ。1975年の沖縄国際海洋博覧会の政府出展館、海洋文化館の展示品としてオセアニアの海洋民族の使う生活用具や漁具を集めた。滞在したのは、トラック

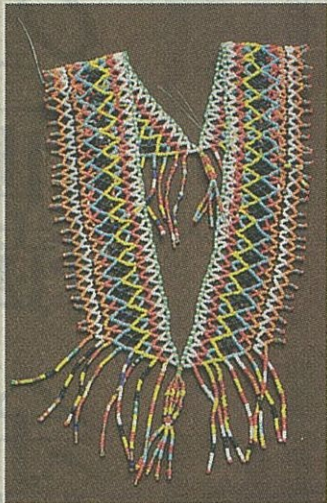
(現チューク)州の離島。そこで4カ月、ナカヤマ家の

人びとにお世話になった。

20年から当地の商社に勤めた中山正実さんは、その島の酋長の娘と結婚し、大統領となるトシオら、6男1女をもつけた。戦後送還されたが、72年に帰島した。

ミクロネシアは戦前、国際連盟の委任統治下で島民に倍する10万人の日本人が住んだ。敗戦で強制送還。戦後は、国際連合の信託統治領となり、米国が支配した。言語や教育、通貨といった社会の屋台骨が米国流に塗り替わると引き換えに、日本の痕跡は一扫された。

それでもトラック諸島の年配の人はたいてい日本語



ミクロネシア大統領の首飾り

ミクロネシア連邦初代大統領は日系人だった

親日派の期待に応え形見分け

を話し、勤勉を重んじる空気が残っていた。私が訪れたのは敗戦から30年。トヨタやパナソニックの製品が島に浸透し始めたころだ。

「あの日本がよみがえりつつある」という期待にも似た感情が芽生えていた。

そんな親日派の視線を背中に感じながら、現地調査にいそしんだ。私は追い込み漁や、椰子の実割りを率先して手伝った。このときなぜか米国人の平和部隊の青年も一緒だった。大学を出たての英語教師で、あきらかに我々日米の2人を競わせようという魂胆だ。

というのも、米国流の教育を受けた現地の若者は権利ばかり主張して、ろくに働かない。私に「米国青年に勝る日本の若者像」を見出したかったのだ。

初めての海外調査で張り切っていた私は、親日派の期待に応えるべくがんばった。ビーズの首飾りはあれこれ目をかけてくれたナカヤマ家からの、勳章のようなものだ。